

# UIFA JAPON NEWSLETTER

## ■主な内容

特集：韓日シンポジウム特集

韓日シンポジウムで感じたこと

韓日シンポジウムの概要

講演後記 1・2

シンポジウム参加記 1・2

ポストシンポジウムツアー

第8回 海外交流の会、アメリカ編

### ■韓日シンポジウムで感じたこと UIFA JAPON会長 中原暢子

昨年第1回の日韓シンポジウムの時も皆様に大変ご苦勞をかけたのですが、今回、小川信子氏発表の「住居をめぐる女性」では、松川理事の企画構成で、皆様のお力によりなかなか見ごたえのある年表ができました。やがて皆様にもご報告致します。またこれをもう少し充実させて、1996年のハンガリー大会向けに、さらに日本大会までには何とか単行本にできないかと思っています。

今回のシンポジウムで感じたことは、それぞれの発表はよいのですが、両国の歴史の重さ、現在の家庭や、家族に対する考え方の違いから、なかなか意見が噛みあうところまではいけなかったことです。2国間でもこうですから、これが国際会議ともなればもっといろいろな意見も出ることでしょうし、それによってまた、自分を見直し、より相手方を知る機会も持てるかと思えます。いずれにしても各々の考え方の違いをはっきり意識することから、国際シンポジウムは始まるのだという感慨を深くいたしました。

### ■韓日シンポジウムの概要 山田規矩子

テーマ 21世紀の新住居文化—女性が主役である

日時 1995年9月30日(土) 10:00~18:00

会場 POSCOセンター アートホール

参加者 約 250名 日本からの参加者 講師坂本一成東工大教授  
UIFA会員10名 他1名を含む12名

会場は竣工後1ヶ月の新しいガラス張りの高層ビル-KIFA(韓国女性建築家協会)金華連会長、UIFA中原暢子会長の挨拶で会は始まり、午前中は2人の講師による講演、午後は3人の講師による講演、コーヒーブレイクをはさんで5人の講師及び4人のパネラーが参加してのパネルディスカッションと豊富な内容のシンポジウムであった。

- 主題発表1. 住居形態の変遷と女性 池 淳 建築家
- 2. すまいをめぐる女性—女性建築家の戦後史  
小川信子 UIFA副会長 日本女子大学教授
- 3. 変る女性・変るべき住まい 金鎮愛 都市計画家
- 4. 現代の空間の女性性化 坂本一成 東工大教授
- 5. 変る社会・変るべき住まい 趙 成龍 建築家

パネルディスカッションパネラー 上記5講師及び中原暢子・UIFA会長、李丙潭・現代産業開発副社長、任昌福・成均館大学教授、曹惠貞延生大教授

司会 妻時華 暁園専門大教授

懇親会 韓・日両国の会員紹介、講演者及び協賛企業への感謝牌贈呈、金会長へのUIFA JAPONからの花束の贈呈、韓国無形文化財成昌順の伝統音楽パンソリの公演など華やかに和気々と親しみのこもった会がもたれた。

**インタビュー**

日 여성 건축가협회장  
나카하라 노부코씨

「환경과 하나가 되면서 남성과 여성이 함께 어우러질 수 있는 새로운 주거공간 개념이 여성건축가들에게 주어지고 있습니다。」

지난달 30일 한국여성건축가협회(회장 김부채)가 주최한 韓日여성건축가 심포지엄「21세기 신거주문화, 여자가 주역이다」에 참가한 일본 여성건축가협회 나카하라 노부코(中原暢子・66)회장은

“新 주거공간 女건축가에 달렸다.”

은 21세기 주거공간은 개인의 공간을 강조하면서 환경과 합치되는 방향으로 발전해나갈 것이라고 하며 이 과정에서 여성 건축가들의 역할이 어느 때보다 중요하다고 말했다.

일본에서 여성 건축가가 처음 탄생한 때는 47년, 그만큼 여성들에 의한 주거 문화 개념이 높아졌다는 발음이다. 하지만 그 이후 꾸준히 늘어 90년대엔 일본 전체 건축가의 36%를 차지할 정도로 성장했다. 앞으로는 여성의 시각으로 주거공간을 설계하고 가꾸는 노력이



필요하다는 주장이다.

“나카하라 회장은 「그 일환으로 주거의 개념을 주택에만 머무르지 말고 거리를 포함한 주변환경으로 확대시키고 제안한다. 따라서 이제는 집 앞에 있는 바위를 책상으로 삼거나 창과 벽이 없어 바깥이 그대로 들어오는 열거를 만드는 등의 파격적 통해 자연환경과 하나가 되는 주거주변화를 모색하는 게 중요하다고 그는 강조했다. 92년 창립된 일본여성건축가협회에는 80명의 회원이 가입해 있다. <金鎮愛기자>

(中央日報インタビュー記事から)

### ■講演後記 1

坂本一成

韓日シンポジウムの会場である真新しいポスコセンタービルのアートホールには予想を越えた多くの参加者の方々が集まっておりました。多くの方々のうちには女性ばかりでなく男性の顔も見られ、また交互に聞こえる二ヶ国語の議論のなかで有意義な時間が流れ、和やかなシンポジウムになりました。

この女性の建築家の会議に講師として招かれた一人の男性として、私自身どのようなスタンスをとったら良いか幾分の戸惑いのなかで、話をさせて頂きました。私の話は、「21世紀新住宅文化 女性が主役である」というテーマに引っかけて、新しい時代の空間の性格の可能性をこれからの期待を込めて「女性性」という内容で展開したもので、美学的な空間観に基づくものでした。

このように他の講演の社会学的内容と比べ、より空間論的内容の事もあって幾分違和感がなかったかとの反省もなくはありませんが、こうしたシンポジウムの講演とはなりにくいテーマのなかで、話をさせて頂いたことの意義はあったと思っております。しかし、来るべき居住空間の可能性を「女性性」に対応させたのは、ある種の誤解を生じさせるところもあったのではないかと危惧しております。

居住空間に対する「女性」の社会学的見地は、それなりに認識していたものの、この会議で様々な意見を聞くに及び、こうした「女性」を問題にする考え方の再認識を得た事が、あるいは男性である私にとって今回この会議に参加させて頂いたことの最大の成果かも知れません。

### ■講演後記 2

小川信子

今回の韓日シンポジウムは、「21世紀の居住文化・女性が主役」というテーマでおこなわれた。基調講演としては、韓国から、池淳の「住居の形態の変遷と女性」、日本から坂本一成の「現代の空間の女性性」というテーマで、これを中心に展開された。

韓国からは、新世紀の住いと女性について 性は？ 変る社会の中では？ 役割は？ 主役は？ さらに文化人類学・女性学的見地から家族と環境の関係等さまざまな考え方が発表された。

日本からは、「すまいをめぐる女性—女性建築家の戦後史を辿りながら」、日本における50年間のすまいに関する歴史を、日本の女性建築家の登場の歩みと重ねて、女性建築家による最初の設計事務所を創設した、林雅子、山田初江、中原暢子の作品を系統的に追って、会員の作品の変遷も併せて紹介した。家族関係の変化が、生活の方法に影響し、平面計画が練り上げられる。すなわち、住居のあり方を基本的に変えてきたその歩みは、戦後を築いた、女性建築家の努力と重なることが特に浮きぼりされた。家族の中で個人を尊重し、さらに多様化する家族像と、社会に開かれる人間関係が、それに対応する空間計画として構成される。未来に対する共生居住への思考なども併せて報告した。

共通した問題意識としては、女性の社会活動の拡大にともなって新しい生活の方法が求められている現在、住居の形態の変化は、女性の意思が表現されている。そして、21世紀の居住文化は、男女とも主役であると位置づけ、多様な専門分野の方々と共に、よりよい環境計画をおこなうことが望まれる。



■シンポジウム参加記 1

渡辺喜代美

1995年9月29日、韓国行きはぎりぎりまで腰が重く、いつもの旅の浮き立つ気持ちとは少し異なっていた。従軍慰安婦の問題などにみる日本と韓国の関係を思うにつけ気分はますます重くなった。しかし出発前の重い気持ちは、韓日交流に参集した女性たちのさわやかなパーソナリティのおかげでふきとんだ。

言葉の障壁は、ハンゲルの判らない我々からみれば心配ばかりでせあったが、恐縮なことに日本語のわかる方はかなりおり、また驚くべきスピードでの通訳をする若い人達に敬意を表したい。

シンポジウムの内容は、住宅にみる女性の立場というか参加というか、自立的かかわりというか、過去からこれから見通したなかなかおもしろい論議であった。しかし、社会参加する女性たちのかかえる問題にまでせまる時間はなく、設計論どまりの感もあり惜しい内容であった。これからの課題となった。

さて、ポスト・シンポジウムツアーは、日本の東海道を歩くようなもので、韓国の中心ルートをすなおに歩いた。都市部から地方へのはしらは、遺跡もおもしろいが、むしろ縦断の経路に随所にみられる人々の生活の様子は興味深かった。慶州の一泊を釜山に変更して、韓国側から日本海をみる。歴史を思えば複雑な気持ちである。市場のすごい熱気と海の向こうの不況を重ね合わせる想像図はおもしろい。釜山市場での海の幸は栄螺のつぼ焼き1個と海老1匹とささやかであったが、市場の雰囲気は十分堪能した。混沌としながら整然と営まれる市場の人々にはエネルギーがあふれていた。しかし、視線をかえると、物価は安くない。

■シンポジウム参加記 2

中善寺紀子

昨年秋、東京で開かれた国際シンポジウムでの韓国女性建築家達の熱気と仕事に対する誇りが、とても印象に残った。また韓国が抱えている問題も、日本が歩んで来た建築の流れにも似ている状態に思えた。実際はどうなんだろうか。遠い昔、いろいろな文化の影響を受けたにも関わらず、私にとって近くて遠い国であった韓国が急に身近に感じられた。そんな思いの中で、今回の韓日シンポジウムに参加した。

ソウル市内は地下鉄工事や建築工事やで騒然としていたが、やはり活気に満ちていた。シンポジウム前日の夕べに、KIFAのスタッフの方達からの招待で韓国料理に舌鼓を打った。木の床に胡座をかいて、初めのうちは言葉がすぐには通じなかったが、そのうちには十年來の友達のようにすっかり打ち解けていた。

シンポジウムの会場には250名位の韓国女性建築家が集まっていたが、皆の目が輝いているのが印象的であった。

「21世紀-新住居文化は女性が主役である」というテーマでいろいろな角度から発表が成された。住まいの中での女性の在り方、家族の中の女性、家族の在り方等は、日本と韓国では自ずと異なっている。例えば両国が同じ二世帯住宅という呼び方をしている建物であっても、そこに住む人達の心の持ち方が違う。韓国では親を大事にする気持ちから一緒に住むのだが、日本の場合は経済的な問題のために住む事の方が多そうである。日本からの発表の「すまいをめぐる女性-女性建築家の50年の歴史」を、同時点で両国の比較が出来たらもっと興味深かったと思う。



■ポストシンポジウムツアー

正宗 量子

ツアー参加者6名は、ソウル市の翌朝ソウル市内、景福宮、立民族博物館、壮麗な昌徳宮に古き王朝を偲び、チャーターバスで水安堡へ出発した。秋のコスモス街道や美しい田園風景は、日本のそれと少しも変わらない。しかし、水安堡の市場で見た生活食品類は、純粋な自然食品群で質実そのもの。日本の食文化とは大きく異なる。翌日は、河回村(ハヘマウル)と陶山書院の見学。山々に囲まれ河のU字曲線内に潜むように住む130戸余りの古くてなお現代も住み続けている生きた河回村民族村だ。ここには儒教、同姓村落、仮面劇といった韓国文化の典型が未だに残されている。大儒教学者の柳雲竜、時の総理大臣はその弟成竜だったように大家を輩出した集落だ。韓国の土産によくある木彫りの仮面は、この村に伝わる河回別神巫祭や祭りに使われる12個の河回仮面だが、面を被り乍ら時世を示唆したり皮肉り、祭りが終わると火中に投じ二度と使うことがないという。9面が国宝に指定され更に、魔除けとは言え希少価値と高い美術性ゆえ世界三大仮面の一つに数えられている。安東(アンドン)から陶山書院へは、秘境の趣のある深い谷間沿いに走る。₩1,000(ワン)札の表の白髭の老人、李退溪は李氏朝鮮初期の大儒教学者で、儒教の四端七情論と言う哲学理論大系を確立した人だが、ここで弟子達と修行、四千冊に及ぶ蔵書が保存されている。₩1,000 札の裏に印刷されている建物がここ陶山書院だ。あの秘境にも御飯を炊くかまどに連なる現代の床暖房オンドル設備があり、厳冬にも師弟との暖かいぬくもりが感じられ韓国の文化の一端に触れることかできた。紀元前57年

～935年迄、新羅の王都とした栄えた慶州では、仏国寺、天馬塚、芬皇寺等見学、釜山を経て帰国した。



■第8回 UIFA JAPON海外交流会の会

吉田洋子

「映画づくり・空間づくり」

今年度2回目の海外交流会の会が、11月4日(土)に渋谷の子ども城で開かれました。映画“企業戦士”上映の後、監督であるデヴィッド・フィッシャーさんに「映画づくり・空間づくり」をテーマにお話を頂きました。フィッシャーさんはアメリカと日本の間を往復しながら、両方の文化や人のつなぎ役として女優・又映画や演劇のプロデューサー・監督・演出家などとしてとても幅広く活躍されている方です。

アメリカと日本の文化の違いを意識しながら、東京の空間に対する感じ方の相違・色彩の好み、影の使い方、インテリアの比較、尺八等の音楽効果などについて具体的に解説をされ又、映画づくりの中での女性監督の苦労ばなしには、UIFA会員もふだんの建築現場を思い出してうなづく場面もありました。さらに、コーディネーターの松澤さんが、伝わりにくいところはわかりやすいエピソードなど加えての説明をされ、とてもわかりやすい交流会の会となったように思います。



■役員会の報告

第8回役員会(95年9月22日)役員11名出席

会員動向の報告 韓日シンポジウムの打合せ(参加募集要項、担当者・確認事項、講演内容等)、第8回海外交流会の会の検討

第9回役員会(95年10月25日)役員12名出席

韓日シンポジウムの総括、第8回海外交流会の会の打合せ、第12回UIFA世界大会日本開催に関する検討

■訃報

会員の松本(吉田)安子様には11月7日ご逝去なさいました。ご冥福を祈り謹んでお知らせいたします。

■広報だより

95年もあと1ヶ月をのこすばかり 寒い木枯に足速が早まります。

本号No.14は韓日シンポジウム特集のためNEWS LETTERでおとどけいたします。去年の日韓、今年の韓日シンポジウム、その後1996年UIFAハンガリー大会、1998年のUIFA日本大会と本格的な国際会議がひかえています。会員各位の絶大なご支援を願うところであります。